

事案名	別府湾周辺の事案（大分県44-1）
分類	生産・保有 廃棄・遺棄 発見・被災・掃海等処理
資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・証言〔1〕</li> <li>・「旧軍ガス弾等の全国調査結果報告（案）」資料1の2〔2〕</li> <li>・「毒瓦斯及其ノ充填兵器処理ニ関スル件」昭和20年9月〔3〕</li> <li>・「日本海軍ニ於ケル化兵戦関係概況」（日付なし）〔4〕</li> <li>・Reports on scientific Intelligence Survey in Japan. September &amp; October 1945. Vol. IV Chemical Warfare 11-NOV-45〔5〕</li> <li>・『相模海軍工廠』1984年〔6〕</li> <li>・『朝日新聞』昭和47年5月28日〔7〕</li> <li>・「各航空廠引渡目録」2/2〔8〕</li> <li>・『山陽新聞』昭和47年5月25日〔9〕</li> <li>・『朝日新聞』昭和47年5月24日〔10〕</li> <li>・『毎日新聞』昭和47年5月24日〔11〕</li> <li>・『朝日新聞』昭和47年5月24日大阪夕刊〔12〕</li> <li>・「鹿児島地区（出水、人吉、富高、鹿屋を含む）引渡目録」昭和20年10月〔13〕</li> <li>・「浜名湖に投棄された軍用ガスの処分について（通知）」1949年12月28日〔14〕</li> <li>・「別府湾に遺棄されたイペリット毒ガス弾其他に因る漁業被害の補償陳情」昭和31年3月〔15〕</li> <li>・「旧軍ガス弾等の全国調査結果報告（案）」〔16〕</li> <li>・証言〔17〕</li> <li>・「毒ガス弾等調査資料」昭和47年6月5日〔18〕</li> <li>・『西日本新聞』昭和29年4月13日〔19〕</li> <li>・『大分合同新聞』昭和29年5月26日、5月29日、6月7日、7月17日、7月26日、8月21日〔20〕</li> <li>・化学室担当者ノート「戦後における旧軍毒ガス弾等の処理の状況(14.6)」〔21〕</li> <li>・「旧軍毒ガス弾の資料調査について（報告）」（昭和47年7月1日）〔22〕</li> <li>・『毎日新聞』昭和47年5月25日〔23〕</li> </ul>
資料内容概要	<p>終戦時に、大分県内では、国鉄久大線旧宮原トンネルに、イペリット鉄ガメ1,800個（90,000kg）が保有され、耶馬溪に、60kgイペリット爆弾約5,000発が保有されていた。終戦後、旧日本軍により、別府湾に、60kgイペリット爆弾が遺棄され、また、米軍の監督指示により、別府湾に、60kgイペリット爆弾等が廃棄された。その後、昭和29年頃から、別府湾では、イペリット爆弾による被災が発生したため、昭和30年</p>

から昭和31年までに、自衛隊が掃海を行った。

#### 生産・保有情報

- ・元第十二海軍航空廠軍人の証言等よれば、終戦時に、国鉄久大線旧宮原トンネルには、第十二海軍航空廠大分工場のイペリット鉄ガメ1,800個(90,000kg)が保有されていた〔1〕〔2〕。
- ・昭和20年9月9日に、大分県耶馬溪には、60kgイペリット爆弾約5,000発が保有されていた〔3〕〔4〕〔5〕〔6〕。
- ・終戦時に海軍は、イペリット爆弾を大分県玖珠郡のトンネル内に600発、大分県湯布院町近くに4,400発を保有していた〔7〕。
- ・資料によれば、終戦後、第十二海軍航空廠大分に、60kg一号爆弾2,351発を保有していたと記載されている〔8〕。

#### 廃棄・遺棄情報

- ・昭和20年8月23日ごろに、海軍少尉の命令で、第12海軍航空廠の一等兵曹の兵装係員が同僚6人と計5,000発の爆弾を別府湾に投棄した〔7〕。
- ・終戦時に、貨物自動車運送会社に旧海軍大分航空廠から「米軍の進駐で毒ガス弾を保持していることがわかると困るから」と投棄を要請されて、貯蔵庫代わりのトンネルから毒ガス弾約4,000発と爆弾類を輸送し、大分市西大分の大分港沖合い6キロ以上の海域に投棄した〔9〕〔10〕〔11〕〔12〕。
- ・昭和20年11月25日から12月4日までに大分港と日出港の中間の位置の水深60mの場所に米軍の監督、旧日本軍の立会いで、六番一号陸用爆弾3,811個を海中投棄した〔13〕。
- ・昭和21年8月頃までに、米軍の監督指示により、イペリット型薬缶2,351個(内容量計39,967kg)が海洋投棄された〔14〕。
- ・終戦当時貯蔵していたイペリット爆弾3,811発とその他の砲弾薬など約7,000トンを別府湾に投棄した〔15〕。
- ・証言及び「旧軍ガス弾等の全国調査結果報告(案)」によれば、進駐軍の命により、別府湾沖豊後水道に、イペリット鉄ガメ1,800個(90,000kg)が、投棄された〔1〕〔16〕。
- ・別府湾への海洋投棄に携わったと主張する第12海軍大分航空廠のパイロットの証言によれば、「上官の命令で、毒ガス弾を別府湾の中央部に船で50本程度投棄した」と記載されている〔17〕。

発見・被災・掃海等処理情報

- ・昭和29年3月16日に、爆発物等引揚業者が作業中にイペリット爆弾1発を引き揚げ、作業員3名が負傷した。海上警備隊に処分を依頼した〔16〕〔18〕。
- ・昭和29年4月10日に、漁民がイペリットで被災した。これまでの被災者数は37人に達した〔19〕。
- ・昭和29年5月25日から28日までに、別府湾で調査のために小規模な掃海を実施し、ガス弾を6発と通常弾などを引揚げ、電探による投棄個所は80数箇所にのぼることを確認した。厚生省国立衛生研究所がガス弾の中身をイペリットであることを検査で確認した。別府湾の掃海は防衛庁が実施することを確認した〔20〕。
- ・昭和29年5月24日から29日までに、別府湾でイペリットガス弾6発が発見された〔16〕。
- ・昭和29年6月14日から19日までに、別府湾でイペリットガス弾6発が発見された〔16〕〔21〕。
- ・昭和29年10月6日から13日までに、別府湾でイペリットガス弾が発見（数量不明）された〔16〕〔21〕。
- ・毒ガスによる被災により治療を受けた者の人数は、次の通りである。昭和27年11名、昭和28年2名、昭和29年3名〔15〕。
- ・昭和29年3月にサルベージ業者が砲弾を引揚げ中、毒物による被災が発生した。昭和29年3月下旬から6月下旬までに、大分県と第7管区本部及び呉地隊は、イペリット弾の調査を実施した。昭和29年7月に、大分県からイペリット弾の引揚げ処理について国に陳情書が提出された。昭和30年4月に、関係省庁の統一見解により、防衛庁が引揚げ処理を実施することが決定した。昭和30年9月15日から昭和31年12月6日まで、呉地隊の計画及び作業の指揮、監督ならびにサルベージ会社からの傭船によりイペリット爆弾2,498発を引揚げ、海中投棄処分を実施したとする資料と〔22〕〔23〕、引き揚げたイペリット爆弾を2,494発とする資料〔16〕と、イペリット弾1,360発、ガス弾の疑いがあるもの1,137発、その他の砲弾・小銃弾など計435,000発とする資料がある〔9〕。
- ・資料によれば、昭和35年10月12日に大分県杵築市で、6番陸用式（爆弾）1発が発見され、焼却処理されたと記載されている〔21〕。
- ・昭和45年6月19日に大分県大分市から不明爆弾1発が発見され、コンクリートで密封され海中投棄されたと記載されている〔21〕。
- ・昭和61年9月11日に、大分県安岐町（大分空港拡張工事現場沖300m）で発見された旧海軍70kgイペリット爆

	<p>弾1発について現物鑑定の要請があったが、以後中止したと記載されている〔21〕。</p>
--	--